

令和5年度(2023年度)北海道・ニュージーランド
高校生交換留学促進事業報告書
High School Student Exchange Program 2023-2024



新しい自分



始まる



令和6年(2024年)4月
北海道教育庁学校教育局高校教育課
High School Education Division
Bureau of School Education
Hokkaido Board of Education

はじめに

北海道教育委員会は、令和2年（2020年）にエデュケーション・ニュージーランドと教育分野に関する覚書を締結し、令和5年（2023年）に北海道・ニュージーランド高校生交換留学促進事業の実施が実現しました。初年度の今回は、14の道立高校等から18名の生徒の応募があり、5名の生徒が2週間の留学を終え、大きく成長して本道に戻ってきました。

日本社会全体におけるグローバル化の進行、日本企業の海外進出あるいは外国企業の日本進出などにより、日常生活において外国人と関わる機会はより一層身近なものになってきています。高校生段階で海外留学を通じて異なる習慣・価値観に触れること、外国人と意思疎通を図ること、見知らぬ土地で多くの苦楽を経験することは、何事にも代えがたいものです。

今回の参加生徒に対するアンケートでは、5名全員が「英語力・コミュニケーション力が高まった」「国際社会への興味関心が高まった」「また留学をしたい」と回答しています。

過去、当課で主催する留学事業に参加した生徒の中には、本事業をきっかけに海外の大学や国内の外国語系大学へ進学した生徒がおります。今回事業に参加した生徒が本事業を契機に、本道はもちろんのこと、国内外で大いに活躍されることを期待しております。

最後になりますが、本事業を無事実施することができたことにつきまして、関係者皆様に厚く御礼申し上げます。

道教委では、引き続き本事業が、本道とニュージーランドとの友好親善に寄与するとともに、本道の高校生に夢と目標を与える機会となるよう努めてまいります。

令和6年（2024年）4月

北海道教育庁学校教育局高校教育課長 高田安利

■ 参加留学生

	学 校 名	学年
1	北海道札幌北高等学校	1
2	北海道千歳高等学校	1
3	北海道室蘭栄高等学校	1
4	北海道旭川東高等学校	1
5	北海道帯広柏葉高等学校	1

■ 引率者

所 属	職 名	氏 名	期 間
北海道千歳高等学校	教 諭	辻 広美	令和6年(2024年) 3月 9日(土)～14日(木)
北海道教育庁学校教育局 高校教育課国際交流係	指導主事	土居 早苗	令和6年(2024年) 3月21日(木)～24日(日)

■ 事業実施日程

年 月 日	内 容	備 考
令和6年(2024年) 1月29日(月)	事前研修会	
2月27日(火)	渡航前ミーティング	
3月 6日(水)	「海外の高校生とのオンライン交流会」に参加し、ワイヌイオマタハイスクール生徒と顔合わせ	S-TEAM 教育推進事業「社会との共創」推進プロジェクト「グローバル型」
3月 9日(土)	留学生出発	
3月11日(月) ～ 3月22日(金)	ワイヌイオマタハイスクール通学 ・スピーチ ・カパハカ鑑賞 ・Farewell Lunch	各自ホームステイ
3月24日(日)	留学生帰国	

1 参加留学生報告書	
• 北海道札幌北高等学校 1年 「ニュージーランド留学を終えて」	1
• 北海道千歳高等学校 1年 「ニュージーランド交換留学事業 報告書」	4
• 北海道室蘭栄高等学校 1年 「ニュージーランド留学報告書」	8
• 北海道旭川東高等学校 1年 「ニュージーランド留学を終えて」	10
• 北海道帯広柏葉高等学校 1年 「北海道・ニュージーランド高校生交換留学促進事業 報告書」	13
2 引率教諭報告書	
• 北海道千歳高等学校 教諭 「令和5年度(2023年度)北海道・ニュージーランド高校生交換留学促進事業 引率報告書」	16
3 アンケートから見える事業効果	19



ニュージーランド留学を終えて

北海道札幌北高等学校 1年

1 留学のきっかけ

元々、英語が好きでいつかは海外に行ってみたいという気持ちがあり、今回の留学の話聞いて応募しました。日本以外の国の文化を実際に体験してみたい、自分の英語力を試してみたい、という思いもありました。

2 初めての海外

約10時間の長いフライトを終えてオークランド空港に着いた時、流れてくる英語のアナウンスや英語とマオリ語で書かれた看板を見て、自分がニュージーランドに来たことを実感しました。税関検査や入国審査はとても緊張しましたが、これからの2週間のことを考えながら期待に胸を膨らませていました。



3 ホストファミリーとの生活

私のホストファミリーは私を本当の家族のように受け入れてくれました。初めは緊張していて英語をあまり聞き取れなかったり、曖昧な返答になったりすることもありましたが、ホストファミリーの皆は私にわかりやすいように話してくれてとても嬉しく安心したのを覚えています。

私はこの2週間で様々な場所に連れて行ってもらいました。ホストバディが様々なスポーツをやっていることもあり、それらのスポーツの練習風景を見せてくれました。私のバディはキオラヒ(Ki-o-Rahi)というボールゲームと、ワカアマ(Waka-Ama)という舟を漕いでスピードを競うスポーツをしています。どちらもマオリの伝統的なスポーツで、初めて見るものだったのでとても新鮮でした。滞在期間中、ワカアマの試合がウェリントンから車で6時間のロトルアというところで開催され、バディが出場することになったので私も同行しました。ロトルアに行く道中にはさまざまな自然がありニュージーランドの特徴的な地形を見ることができました。羊や牛、さらに馬の放牧まであちこちで酪農が行われていて日本とは違う放牧の仕方が興味深かったです。ロトルアはウェリントンや私たちの住んでいるワイヌイオマタとは雰囲気違って外国人の観光客も多くいました。2週間という短い期間の中でニュージーランドのさまざまな場所を体験できたのはとても良い経験になったと思います。

4 日本との食文化の違い

私がニュージーランドに来て感じた日本の食文化の違いは大きく3つあります。まず1つ目は朝ごはんについてです。日本では主食、主菜、汁物などしっかりとした朝ごはんをとることが多いですが、

ニュージーランドではトーストやシリアルのみ、ドリンクだけで済ませることもあります。私のホストファミリーは私が朝ごはんを食べたいかどうか毎日聞いてくれていたので特に困ることはありませんでした。

2つ目は間食についてです。ニュージーランドでは朝ごはんを食べないので、昼ごはんまでにお菓子を食えることが多くあります。また、昼ごはんもあまりしっかりと食べないので、その後お菓子やフルーツなどをよく食べます。次の学校生活についてでも述べますが、お菓子を食えながら受けてよい授業もあるので、滞在中は常に何かを食べている状態でした。

私はニュージーランド滞在中、食べたことのない料理やフルーツを食べる機会が多くありました。ニュージーランドでは一般的なものでも日本は全く浸透していないものもあり、とても良い経験になりました。



5 学校生活について

私はワイヌイオマタ高校に通って日本の高校と様々な面で全く違うことに驚きました。ワイヌイオマタ高校には一日の最初に Manaaki という時間があります。日本でいうホームルームの時間のようなものですが内容は全く異なっており、生徒は好きな席に座って友達と話したり、音楽を聴いたり、勉強をしたりしています。授業は90分間の3時間授業で、様々な教科から自分で受ける教科を選びます。私は2週間という短い滞在だったので、スクールバディがとっている授業を受けました。数学、英語、日本語、美術、家庭科などの授業を受けましたが自分でレポートや感想文を書く授業がほとんどで、日本と比べて話し合いを設ける時間が多い印象でした。また、授業中もとても自由で先生によってはお菓子を食べてよい授業もありました。昼ごはんは学校で配られる軽食を食べます。サブウェイのサンドイッチやハンバーガー、カレーやラザニアなどどれも美味しかったです。休み時間も生徒はバスケットボールをしたり、友達と談笑したり、自由に過ごしていました。日本と全く違う雰囲気が刺激的でとても面白かったです。

6 マオリについて

ニュージーランド滞在中ホストファミリーがマオリ人の方であることもあり、さまざまなマオリの伝統文化に触れてきました。ニュージーランドに到着した日にすぐマオリの儀式を受け、その後カパ・ハカ(Kapa-Haka)を私たちに見せてくれました。男女合わせて40人ほどで形成されるそのグループのハカは、とても迫力があり感動したのを覚えています。ニュージーランドの人はマオリの文化をとても大切にしている、生活に根強く結びついていたのが印象的でした。最初の週末にはマラエと呼ばれる周りの伝統的な建物でカパ・ハカのグループで合宿をしました。みんな朝から晩まで練習をしていました。合宿の最終日には私たち留学生をウェリントン博物館に連れて行ってくれました。その

博物館ではニュージーランドの歴史やマオリの伝統文化、環境について展示されています。大きな模型や、実際に使われていた道具など日本とは違った展示方法が面白かったです。

ニュージーランド滞在最終日はカパ・ハカの大会がありました。大きなホールで披露したハカは今まで懸命に練習してきた姿を間近で見ているのもあり大きく心を打たれました。

7 自分の英語力の成長と課題

最初はたくさん流れてくる英語を聞き取るのに精一杯で自分の意見をはっきり言えていませんでした。ですがホストファミリーやスクールバディが話しかけてくれて、緊張も和らぎ、返事にも自信がついてきました。文法が合っているか、単語の発音が間違っていないかなど最初は考えて会話が億劫になっていましたが、慣れてきて細かいことは考えずに自分の思った言い方で会話をするのが大切だと分かりました。

ニュージーランドに実際行って感じたのは自分の単語力不足です。これからは文法だけでなく単語にも力を入れて勉強していきたいです。

8 最後に

私はこの2週間で様々な『初めて』を経験しました。こんなにも有意義な2週間で過ごせたのはニュージーランドに行かせてくれた日本の家族、私を温かく受け入れてくれたホストファミリーの皆、この他にもたくさんの方々のおかげです。

また、必ずニュージーランドに会いに行きます！本当にありがとうございました！！



ニュージーランド交換留学事業 報告書

北海道千歳高等学校 1年

1 参加理由

幼い頃から洋楽、洋画が大好きだった私はいつからか海外に大きな憧れを抱くようになっていました。また、英語という言語を使いもっとたくさんの人と話したい！という気持ちもいつからか自分の中で大きくなりました。留学に行けるという機会は本当に貴重で大事だと思います。私にとっては、留学は自分の将来の夢の1つでもあったので、最高の思い出となりました。

2 ホームステイ先での生活

まず最初に、家の外観、中についてお話ししたいと思います。

私がホームステイしていた家、その近辺の家は共に広い庭があり、平屋の家が多かった印象です。

ホストファミリーの方、ホストファミリーのご友人、親戚、知り合い等、自分に関わってくれた方皆さんは本当に優しかったです。

特にホストファミリーの方は面白く冗談好きの反面、マオリ族の伝統を物凄く大事にしている方でした。そのため、カパハカパフォーマンス、カパハカの大会を間近で見ることができました。

カパハカって何？と思う方もいるかもしれません。カパハカとハカはどちらもニュージーランドの先住民マオリ族の伝統的なパフォーマンスです。ですが、カパハカは直訳すると”ラインダンス”という意味になり、伝統的な楽器の使用や、掛け声や合唱、優雅な舞から戦いを鼓舞するダンスなど、多種多様な構成となっていますが、ハカは儀式や戦闘に挑む際にパフォーマンスするなど少し意味が違います。私もニュージーランドに渡航するまでは、ハカの事しか知らずカパハカについては聞いたこともありませんでした。

話を戻して、ホームステイ中の食事情についてお話ししたいと思います。

ニュージーランドでは毎日大体5食ほど食べていました。

朝食、中休みに学校で配られるランチ、昼休みに配られるランチ、帰宅してからの間食、夕食、といった食事ルーティンでした。

そのせいか日本に帰ってきて食べる量が物凄く増えたことを実感しました。

個人的には口に合わないものはなかったですが、どこで何を食べても味が濃かったのも、少しだけ薄味の日本食が恋しかったです。





放課後は友達とショッピングモールに行ったり、丘に行って夕焼けを見たりしました。



3 ワイヌイオマタ高校

私は学校にスクールバディがいたので、その子について行って同じ授業を受ける形でした。授業に関しては”ゆるい”。もうこの3文字に限ります。日本とは授業体系が全く異なります。

まず、先生が黒板を使って授業をする教科がほとんどなく、大体の授業では各自レポートを作成し、先生に提出というものでした。また日本ではあり得ない、授業中に食べ物を食べる事も全然平気なので授業中に皆でお菓子を食ったり、ゲームをしたりしました。1番驚いたのは、皆チャイムが鳴ってから教室へと動き出すんです。



しかも、授業の最後の10分は大体みんな勉強をやめてお喋り or お遊びタイムになっていました。先生にもよりますが、基本どの先生も私語はうるさくなくても良いという方針の先生が多かったように感じました。学校ではすれ違った時に挨拶をしてくれたり、こんにちは！と日本語で元気に挨拶してくれる子もいました。日本の文化やアニメを好きな子が多く、日本語や日本について質問してくれる子が多かった印象です。

4 マオリ民族の文化に触れて

渡航前はマオリ民族について全くといっていいほど何も知りませんでした。ラグビーでハカをしているのを見て、ハカをする民族なんだなーくらいしか知りませんでした。ですが、ニュージーランドについた当日、ホストファミリーの方々がマオリ族の歓迎の儀式を行ってくただけでなく、目の前でカパハカを披露してくれました。あの時の感動は一生忘れないと思います。

また、博物館に行った際にもマオリの方々のしていた生活、歴史について展示や写真から学ぶ機会がありとても良かったです。アイヌ民族と凄く似ているなと思いました。マオリ民族の方にアイヌ民族について説明したところ、相違点や文化について凄く興味を持ってくれて本当に嬉しかったです。



5 今回の留学を通して

今回の留学を通して、異文化、言語について学ぶ良い機会でした。気候も心地よいもので本当にニュージーランドが恋しいです。マオリの方々や学校でお友達と話して、自分はどんな人間なのか、自分はこれから自分という人間のどんな部分を伸ばしていきたいのか等、自分を深く見つめ直す良い機会でした。

ニュージーランドでは明るい性格の方が多かったので、自分自身も凄く良い影響を受け、より社交性が伸びたと思います。言語に関しては、実力が伸びただけでなく渡航前と比べてみて凄く自信がついたと実感しています。意味を聞くなど、理解できなかったことや質問をすることに対して恥ずかしさを感じなくなったことで、より英語を使うことに集中、楽しみを感じることができました。

これからはニュージーランドで体験したことを活かして、人間としても語学に関しても自分はどうありたいのかを意識して生活していきたいです。



ニュージーランド留学報告書

北海道室蘭栄高等学校 1年

3月頃のニュージーランド、ウェリントンは夏の終わりで気温は10度から17度くらいで夜は少し肌寒かったです。ウェリントンは海に面していて風が強い日が多いです。その影響でワイヌイオマタがあるローワーハットも山に囲まれてはいましたが風が冷たかったです。滞在中、雨の日はほぼなく晴れの日が続いていました。冬には雨の日が増えるそうで気温も3から8度程度に下がるそうです。ウェリントンは首都ではありますが東京のような大都市ではなく、自然が多くきれいな町並みが広がっている都市で、電動スクーターでの移動も可能でした。ワイヌイオマタも同じく自然が豊かでした。海もきれいで泳ぐ機会がありましたが少し冷たかったです。全体を通して気候については問題なく過ごせることができよかったです。



3月10日、空港に到着するとホストファミリーが迎えに来てくれていました。現地の人は明るく、フレンドリーで馴染みやすい印象でした。例えば現地の学校では1回会っただけでも気軽に声をかけてくれたりします。ホームバディとは音楽の趣味などが合って話が盛り上がりました。食べ物はニュージーランドに「ハンギ」という伝統的なものがあります。「ハンギ」とは地面に穴を掘り、焼いた石を詰めて葉で包んだジャガイモ、にんじん、ラム肉や豚肉などを蒸し焼きにした料理です。しかし、現代は時間がかかってしまうためポットなどで作るみたいで、ホストファミリーが1度作ってくれたものは美味しかったです。その他の日はバーガーやフィッ

シュアンドチップス、バターチキンなどの油っこいものも多く、美味しかったです。日本食が恋しくなりました。フルーツは日本より日常的に食べられている様子でした。りんご、プラム、バナナや少し酸味の強いキウイのようなフェイジョアという日本では見られないフルーツがありました。

3月11日からは現地の学校、ワイヌイオマタ高校へ通いました。朝は7時半くらいに起きて8時半に車で送ってもらいました。8時50分から9時20分まで各クラス、Manaakiという日本の朝のホームルームのようなものが始まります。ここでは1日の連絡事項や部活の勧誘などがされます。ニュージーランドの高校は学年関係なく自分のレベルに合った受けたい授業を選択するのでManaakiでもいろいろな人がいます。ホームバディはマ



オリの人しか入れないクラスにいたので別の建物にいました。教室も日本のように分かれているのではなく、ホワイトボードで仕切られているだけのスペースやガラス張りの部屋で勉強しました。タイムテ

ーブルも1日90分授業が3コマで、1時間目と2時間目の間にモーニングティータイム、2時間目と3時間目の間にランチタイムがあります。僕はスクールバディと同じ授業を受けました。イングリッシュ・ライティング、ジャパニーズ、パシフィックスタディ、数学、アート、ドラマがありました。



イングリッシュ・ライティングでは、自分の好きな歌の歌詞について思ったことを書くことをしました。英語の歌詞を読み取るのが難しく、まとめるのも大変でした。また、授業中に集中していない人がいたらクイズを始めたりと90分授業を楽しめました。

ジャパニーズの授業では日本人と外国人がペアになってお互いサポートしながらスピーチの準備、練習を行っていました。この時間の最初の授業で短期留学生の自己紹介と自分の街についてパワーポイントでスピーチをしました。僕は「使えばよかった」という言い回しなどが後から出てきて反省点も残りましたが、自分なりに発表できたと思います。

パシフィックスタディではニュージーランド周辺の太平洋の島々について学びました。各島の言語の意味、発音の違いや語源を調べました。生徒の中にもフィジーやサモア出身の人がいたので文化の交流ができ面白かったです。グループで話し合いをして意見を発表することもありました。

数学ではレベルにあわせて様々なクラスがあります。僕はスクールバディと同じ授業を受け、ある商品の税金の値を求める計算をしました。計算機を使っても良いことに驚きました。

アートではマオリの建物を描いたりドラマではみんなで音楽を聞いたりと自由度がとても高かったです。



全体を通して毎時間パソコンを使うし、日本より話し合いの時間が多かったです。ただし自由度が高い代わりにしっかり自分の考えや意志を持たないといけないと思いました。また、色々な人がいるので相手を理解してコミュニケーションをとることも大切だと感じました。

休み時間にあたるモーニングティータイム、ランチタイムは学校から昼食が配られるので取りに行き、バスケットボールやサッカー、バドミントンも楽しめます。様々な部活があり、僕はホームバディが参加しているラグビーとキオラヒを体験・見学しました。

休日はホストファミリーにウェリントンまで連れて行ってもらい買い物をしたり、博物館で自然や歴史について学んだりしました。夕方には地域のハカの団体の練習を見学させてもらう機会があり、とても迫力がありました。

毎日新しいこと、楽しいことばかりであつという間に2週間が過ぎてしまいました。今回の滞在を通して自分自身、民族について学ぶことの大切さと座って学ぶだけが全てでないと感じました。また、日本の学校ではなかなかやらない、生活していないと使わない単語など日常的な英会話が上達したと思います。最後にホストファミリー、スクールバディ、保護者、先生方本当にありがとうございました。絶対にまたニュージーランドを訪れたいです！



ニュージーランド留学を終えて

北海道旭川東高等学校 1年

1 はじめに

小学生の頃から英語学習が好きで英語を使って世界の人と話し、繋がりを持つという夢を持っていました。新型コロナウイルスの流行もあり、中々行く機会がなかったのですが、今回の北海道・ニュージーランド高校生交換留学促進事業に参加し、1つの夢を叶えることができました。この事業に携わって頂いた皆さん、ありがとうございました。

私の今回の研修の目的は自分の英語力の確認と向上を図ること、マオリの異文化に触れ、現地の方々と生活をし、自分の価値観を広げていくことでした。

2 ワイヌイオマタハイスクールでの学校生活

日本の高校のシステムとは大きく異なりました。まず、ワイヌイオマタハイスクールでは1コマあたり95分の授業で1日4コマ構成となっていて、1コマ目はManaakiという先生と生徒が絵を描いたり、カードゲームなどのアクティビティを通して交流したりする時間が設けられています。スクールバディしか知らない私にとってその時間はとても貴重なものでした。私の目的はたくさんの人と英語を使って話すことでした。ですが始めの方はなかなか雰囲気馴染めず、積極的に自分から話すことができなかったのでアクティビティに大いに助けられました。



2コマ目以降はそれぞれ自分たちの選択した授業を受けます。1週間のうち、5個の授業だけを取り、集中してその分野を学ぶという形でした。日本にはない、写真の授業やマオリについて学ぶ授業があり、自分の興味を深掘りしたり、得意なことを更に伸ばせたりできるシステムでした。どの授業も生徒間の交流が多い印象でした。また、「自由」ととても感じました。授業に関心がある、ないがハッキリしていて関心のある生徒はどんどん先生に質問をし、興味を深掘りしていました。

2コマ目の後にインターバルという中休み、3コマ目の後にお昼休みがあり、どちらの時間にも給食が提供されていて、バターチキンやピザなどが出ました。お昼休みには体育館で行われるバスケットボールの試合やバドミントンをして楽しみました。授業が始まるチャイムがなりますがチャイムが鳴った後に行動をしているのを見て驚きました。思い返してみれば時間に追われている友達よりもマイペースな友達が多いように感じます。お昼休みが終わると4コマ目の教室にそれぞれ向かっていきます。



基本、宿題が出ません。放課後の過ごし方はそれぞれで放課後に開放される体育館でバドミントンやバスケットボールをしたり、友達や家族と時間を過ごしたりしていました。そこで十分にリラックスをし、次の日の学校に備えていました。

3 ホームステイ先での生活～マオリ～

ホームステイ先の家族はマオリの方々でした。私たちが帰国する日に Kapa Haka というマオリ文化の舞踊を披露する大会があり、それに向けて練習に励んでいました。その中で日本では見ることのできない、ポイという紐に軽いボールを付けたものを女性が美しく回すという動きもありました。その美しい衣装や道具、アクセサリーは全て手作りされていると聞いて驚きました。私も最終日に mamaiapendant というマオリ柄の牛の骨で作られたネックレスを頂きました。他の方々が付いているネックレスもそれぞれ形が異なり、込められている意味も異なります。例えば私のものは魔除けやエネルギーが得られることを祈るという意味でした。

また、多くの方々がそれぞれマオリを象徴するタトゥーをいれていました。日本ではあまり良いように見られることのないタトゥーですが、ニュージーランドで私が見たタトゥーはマオリ柄が

施されていて誇りを持っているように見えました。

週末にはマオリの人々がマラエに泊まり、共に生活をしていました。私もそこで生活をしました。マラエの外装と内装共に彫刻が施されていました。ご飯はマオリの伝統料理を頂きました。カムカムというズッキーニに似たような初めて見る野菜や、ハンギというお肉と葉野菜を蒸し焼きにする料理など日本では滅多に見ないものまでたくさん頂きました。

共にマラエで過ごした方々はとても親切で気さくでした。マオリ語を教えてくださいたり、日本語に興味を持っていて日本語の質問もして下さったりしました。日本のお菓子を持っていったのですが、とても気に入って下さったようで嬉しかったです。

4 ホームステイ先での生活～お出かけ～

Kapa Haka の練習がない日の放課後はドライブや大きなショッピングモールへお買い物に行きました。私からしたらショッピングモールに置いてあるものの規模が大きく、ただのスーパーマーケットに比べてコストコにいるような感覚でした。

ワイヌイオマタの近くに海があるので夜にドライブをして海を見たり、市を一望できる丘などに行ったり夜景とニュージーランドの自然を全身で感じました。生えている植物が北海道では見ることの



できない、亜熱帯性気候の木や草を見ることができました。

またニュージーランドの美術館にも連れて行って下さいました。ニュージーランドの戦争の歴史やマオリの歴史などを英語で学ぶことができました。



5 ニュージーランド研修を終えて

ニュージーランド研修を通してここには書き尽くすことができないほどのたくさんの事を学ぶことができました。ニュージーランドの歴史やマオリ文化はもちろん、現地の方々との英語でのコミュニケーションのとり方や実際の生きた英語を学ぶことができました。

2週間ニュージーランドの方々と共に過ごし、自分の今までの視野が狭かったことを改めて実感したと共に、今回の経験を通して日本国内だけでなく世界へと視野や価値観も広げることができました。今回は貴重な経験をさせて頂き本当にありがとうございました。この経験を活かし、自分の将来を決めていくと共に、日本だけに留まらず世界へと目を向けることのできる人材になれるように日々精進して行きます。

北海道・ニュージーランド高校生交換留学促進事業 報告書

北海道帯広柏葉高等学校 1年

これが私にとっての初の海外経験であった。以前から短期の留学に興味があったが、特定の市民限定のものの事業が数多くあり、今回のこの事業は北海道の高校生なら応募できたので、真っ先に応募した。将来は海外で仕事をしたい、そのためには実践的な英語の習得が必須だと思い、この事業に応募した。

1 ワイヌイオマタ高校

校舎の構造は日本のそれと大きく違い、広い敷地に校舎が何個かあり、それぞれがいくつかの教室に分かれており、私たちはほかの校舎の教室に移るためには外を移動するという方式だった。

高校では Manaaki という日本でいうホームルームのような時間から一日が始まった。初日は皆何かノートに書いていて、私も書くように言われたが、とにかく何かを書けと言われたので抱負を書いておいた。毎朝このようなことをするのかと思ったが、日によってさまざまだった、というより各々が好きなことをやっているように思えた。実際私も2日目には Manaaki の時間にポーカーをやっていたし、ある日はずっとおしゃべりをしていた。



直前にも書いたが、この高校での生徒の振る舞いは「自由」そのものであると感じた。誰か一人はバスケットボールを持ち運ぶ人、ヘッドホンに常に首にかけている人、授業中に菓子を頬張る人…などの日本では見たことのない姿の人たちをたくさん見た。明らかな価値観の違いを感じた。

ワイヌイオマタ高校では1-2時間目、2-3時間目の間にそれぞれ Morning tea の時間と昼食の時間が存在する。Morning tea の時間でカレーだったりピザだったり配られ、その時間で食べたり、また昼食の時間でもらって食べることもできた。またその時間中でショックだったのが、もらった軽食にあった嫌いな部分を惜しげもなく捨てていたことである。なかには一口かじって口に合わない判断するやいなやすぐ捨てている人もいた。留学中での数少ない好きになれなかった点である。



2 授業

私がこの2週間で受けた授業は英作文、日本語、写真、数学、食だった。

英作文の授業では特に課題が出されず、特にすることがなかったので、周りの生徒に提案されたニュージーランドと日本の音楽の比較についてエッセイを書いて見てもらった。褒めてもらって自信に繋がった。また、この授業では周りの生徒も自身の課題にある程度余裕があり、互いにしゃべる機会もあった。日本の食事や夢などについて話せて有意義だった。

日本語の授業は、私は低学年レベルのクラスと高校生レベルのクラスに参加した。低学年のクラスでは簡単な自己紹介を、高校生クラスでは詳しい自己紹介やペアの家庭の紹介などを練習していた。自分の母国語を学んでいるところを見るのは不思議な気分だった。また、授業中に私たちも日本語について聞かれたことに答えたのだが、これがなかなか難しい。日常会話は何とかこなしていたが、人に何かを「教える」ということを英語で行うのはとても難しかった。日本語にしかない要素、発音、文

法事項を英語でどう言い表すかはとても迷ったことである。しかし、回数を重ねていくうちに表現の幅が増えてきたことを実感し、自身の成長を感じられた。

写真の授業では自らがとった留学中の写真でコラージュを作るという課題が割り当てられた。作る過程では思い出の整理ができた。



ニュージーランドの数学の授業は日本とは一味違う難しさだった。この2週間では私は三角比の授業を体験した。普通日本の高校で習う三角比の問題は、 30° や 60° 、 45° などの代表的な数値や長さが出て、それらの組み合わせの応用をするのが一般的だが、私たちがやったのは「電卓を用いた計算練習」である。というのも、出てくる数値が中途半端なのである。 42° や 62° 、小数点まで登場した。もちろん長さを用いて角度を求める問題でも、数値が半端になり、電卓を用いて近似値の角度を求めた。最初私はこれに慣れていなかったが、電卓の使い方を覚えた後は簡単だった。写真のように、計算自体は基本の公式を使うものなので、慣れると早かった。日本とニュージーランドでは数学を通じて身に着きたい能力が違うのかもしれない。確かに社会に出たら計算機を用いることが多くなると思うので使い方に慣れておくのは良いことかもしれないと感じた。



食の授業では調理実習を行った。2週間でラザニア、パン、カップケーキを作った。日本と比べて頻繁に調理実習があった。英語で書かれたレシピを読み、英語で示された器具を持ってくることに手間取ったが、班のメンバーとうまく協力できて、連帯感が高まった。



3 生活

日本を発つ前に、バディに今は夏だと伝えられていたので、薄めの服をメインに持っていったが、朝起きた時や夕方は肌寒く、少し厚めの上着を持って行った方がいいと思った。

毎回の食事は、想像はしていたがやはり油が多く、重かった。しかしとてもおいしく、フィッシュアンドチップスが特に好きになった。

私のホストファミリーがあまり活動的でなく、またバディも社会人として働いていたので平日の放課後にどこかに連れて行ってくれることは多くなかった。そこで私は自転車を借りてサイクリングに行き始めた。異国の町を見学したり、自然の中を走ったり、時間があるときは遠くのビーチまで行ったりもした。時間つぶしにサイクリングは最適だったと思う。



4 その他文化

運よくバディの知り合いの誕生会に参加することができた。その人は21歳の誕生日で、ニュージーランドでは21歳になるということが特別な意味があると伝えられた。昔ニュージーランドでは21歳から成人として法的に認められていて、独立を祝うために盛大に祝っていた。それで成人年齢が引き下げられた今でも盛大に祝う習慣が残っているそうだ。



ある日 Kapa haka というハカの練習を見学、体験した。渡航前に映像では見ていたが、やはり目の前で大音量で聞くものは迫力が段違いだった。また、自らも大声でともに歌うと、連帯感が高まった。

5 終わりに

この2週間は間違いなく私の人生に大きい影響を与えた。多様な人種が通う学校に通ったこと、そこで全く違う価値観に触れたことで、多様性を尊重することの大切さを学ぶことができた。また、日本よりも活発だった人と人との交流を見ることで、自分の、人との関わり方を見直すことができた。

この2週間で様々な違う文化に対面した。だが、ここで違いを拒否するのではなく、こちらも日本の文化を紹介することで、異文化交流がはかどった。違うことは当たり前なので、それを受け入れて、一歩踏み出すことが大切であると感じた。



令和5年度（2023年度）北海道・ニュージーランド高校生交換留学促進事業 引率報告書

北海道千歳高等学校 教諭

(1) 生徒について気付いたこと

今回の参加生徒は全員が高校1年生でしたが、英語の語学力・運用能力が高く、積極的に英語でコミュニケーションを取ろうとし、おのおのが多くのことを学び、吸収しよう、という意気込みが感じられました。ウェリントン国際空港到着後、すぐにホストファミリーの熱烈な歓迎を受け、最初こそ、その熱烈さに圧倒されていた生徒たちも、すぐにホストファミリーの心温まるおもてなしに感謝しつつ、安心してホームステイの生活を始めることができましたようです。

到着翌日から早速始まった授業にもすぐに慣れ、現地パティの生徒をはじめ、ニュージーランドの高校生とも仲良く学校生活を送っていました。特に、日本語の授業では、自己紹介を英語と日本語で行ったあと、ニュージーランドの学生に「英語で」日本語を教えたり、茶道の実演やアニメ・ボーカロイドなどの日本文化を紹介するという機会を得ました。日本文化に興味を示すニュージーランドの学生とのやりとりをととても楽しんでいるようでしたが、「なぜ一日（いちにち）を一日（ついたち）というの？」や「なぜこんにちわ、というのに、こんにちは、と書くの？」などの質問に参加生徒自身が納得して教えたり、伝えたりすることができなかつたものが少なからずありました。こういった機会を通して、日本語や日本文化について自分が分かっていたり、理解が曖昧だったりしていることを感じ、改めて自国の言語・文化を見つめ直す、学び直す良い機会になったようでした。こういった機会を積極的に設定して下さった現地高校のスタッフの方々改めて感謝申し上げます。

放課後の時間帯も、ハカやキオラヒの練習に進んで参加し、マオリ文化を体験していたり、のどかな学校周辺の景色や街でのショッピングを楽しんだり、日本や他の国から来ている留学生とも積極的にコミュニケーションをとるなど、貪欲に学びを深めている参加生徒たちにととても感心しました。

「もっと自分から英語でコミュニケーションをとっていきたい！」「自分で責任をもって学び方を選ぶニュージーランドの教育システムが自分に合っていると思う！」「自分の思ったことを言いながら議論を深めていくことが出来る授業が多いので、とても楽しい！」「ニュージーランド英語で聞き取れない音声があり、会話がスムーズにいかないことがあった」「食事が重い（量が多い、味が濃い）が、食文化の違いを体感できて面白い！」「日本に戻ってからの、自身の英語のスキルがダウンしてしまうことがとても心配」など、率直で前向きなコメントをいつも寄せてくれた参加生徒たちから、改めて留学という機会が、参加生徒一人ひとりの単なる異文化理解にとどまらず、国際感覚の涵養に寄与し、それが帰国後、参加生徒の周りにいる人々への多大なる波及効果につながる、ということを学びました。

(2) 引率教員（英語科教員）として学んだこと

ア ニュージーランドの公立学校の現状について

今回お世話になった高校の日本人の日本語教師と留学コーディネーターの方から、ニュージーランドの公立学校の平均的な学校の現状・実情などについてのお話を伺うことができました。生徒については日本同様、様々な生徒が通学している、とのことでした。また、この高校では、年間20～30人程度の日本人留学生を受け入れ、5人の教職員チームで対応している、とのことでした。

イ 留学生の英語能力の向上について

ニュージーランドに限らず、日本から来る留学生の「英語力」のうち、「読むこと」「書くこと」については、勉強量（個人の努力）に、「話すこと」についてはコミュニケーション力（友達を作れるか、など）によるところが多く、留学生活が充実できていない生徒はこのどちらか、もしくは両方においての努力不足による部分が多い、というコメントにととても納得しました。

ウ 教科指導・生徒指導について

Microsoft TEAMSを活用した授業課題の配信、生徒の課題の回収がとてもスムーズになされていました。本校でも、生徒個々が持っているタブレットを活用した学習の機会の提供に努めていますが、もっと頻繁に活用しても良い、と感じました。

また、ニュージーランドにおける日本語の授業は、必修ではなく（何らかの理由（趣味、将来必要、など）、学生に「選ばれる」教科なので、必然的にニュージーランドの学生の日本語使用能力における到達度に大きな差があり、だからこそ「個別最適化」学習（個人々で別々のtaskを行ったり、あえて同じ課題をペア・グループで協力（話し合い）ながら取り組ませる、など）を意識的に行っている、とのことでした。現地の学生からは、「私たちの興味・関心や能力、ニーズに合った課題・タスクを提示してくれているのでとてもありがたい」などのコメントがあり、今後の自身の「個別最適化学習」を踏まえた授業経営の参考になりました。

生徒指導においても、単に叱るのではなく、叱った後でも授業にしっかり参加させ、どの生徒にも孤独感を与えていないという点に改めて感心し、自分の普段の授業を振り返る良い生徒指導の参考事例となりました。

エ ホームステイについて

今回、引率教員もホームステイさせていただけることになりました。これまでの勤務校における留学事業を進める際の手続きや紙面上での情報交換だけでは把握しにくい、生徒とホストファミリーとの関わり方などについて、自分自身が経験しながら確認する機会が得られました。今後の自校での留学事業におけるホームステイに関する生徒への事前指導に関するノウハウを得ることができました。

(3) 本事業に係る課題や感想や、課題と感じたこと

ア 今年度の北海道側留学生の派遣時期および期間について

ニュージーランドの気候（寒すぎず、暑すぎない）やニュージーランドの学校のカリキュラムなどを踏まえると、受入時期が他の時期よりは妥当だと感じました。また、北海道の高校は3月の卒業式後の高校入試業務などによる生徒の休業日の多さなどを踏まえると、日常の学業から離れる日数が他の時期に比べると少なくて済むと思いました。

長期（夏期・冬期）休業中も派遣時期としては候補にいれても良いかとも思いますが、参加生徒の部活動・講習などの学習活動等と重なり、別な難しさも出るかもしれない、とも感じました。

イ 感想・課題と感じたこと

今回の事業に引率教員として参加させてもらうことを通して、ニュージーランドの公立・私立

学校の現状・実情を肌で感じることができました。ICT教育が北海道よりも進んでおり、当たり前のようにtabletを通した授業・課題のやりとりがなされており、また、訪問させていただいた高校の留学生向けのオリエンテーションマニュアルやシラバス、授業の組み立て方がしっかりしていることにとっても関心しました。授業にTAとして参加させてもらう機会もいただき、ニュージーランドの高校生の学習に対する捉え方や考え方に触れることができました。また、どの国の学生も、語学を学ぶには「楽しい雰囲気、オーセンティックなコンテンツ」が必要である、ということなど、自分のこれまでの授業を振り返る機会を得られたのは、とても大きかったです。

ホームステイでの経験も良かったです。自分も生徒と同様の体験をすることを通して、ホームステイの際に注意すべき点、大切にすべき点などを改めて確認することができました。また、留学先の学校での授業では味わえないホストファミリーの心のこもったおもてなしに触れ、それが「もっと話したい」「もっと交流したい」という温かい感情を生み、さらなる英語の使用を促したり、帰国後の英語学習のモチベーション向上につながるという、留学参加生徒の気持ちを追体験することができました。

今後、訪問先の学校が同じかどうかは分かりませんが、可能であれば、北海道の留學生徒の授業参観だけではなく、実際に引率教員や参加生徒が日本語の授業にTAとして参加させてもらった、ニュージーランドの高校生に、普段の学校生活などについてインタビューしたり、放課後の活動（ハカやキオウヒの練習）などに参加してみると良いと思います。とにかく、いろいろな活動・行事などに積極的に参加されることで、引率者が楽しいだけでなく、ニュージーランドの文化や人の優しさに触れる異文化体験ができ、ニュージーランドについての理解が深まると思います。

あえて課題としてあげるものがあるとすれば、引率教員の滞在期間です。費用・勤務校での通常業務などとの兼ね合いでなかなか難しいかと思いますが、できれば、往路から留学期間、復路まで含めて全日程滞在することができれば、参加生徒の成長を目の当たりにしつつ、より多くのニュージーランドと日本との学習スタイル・環境などの相違点、日本の高校が参考にできるニュージーランドの教育の良い点などについてまとめたり、帰国後の授業改善に役立てることができるのではないか、と考えます。

改めて、本事業の引率教員の機会をいただき、ありがとうございました。本事業が参加生徒に与える効果は絶大なものだと思います。現に、参加させていただいた本校生徒は、帰国後早速本校ALTをはじめ、生徒にニュージーランドでの経験・体験を報告し、学び続ける英語学習者としての良い模範を示してくれています。また、引率教員にも多大なる効果を与えてくれる事業だとも思います。今回の事業において、ニュージーランドでお世話になったワイヌイオマタ高校の日本語教師の片岡先生が、個別最適化学習の継続的な提供の必要性、個々の教師の資質の大切さを訴えておられましたが、自分自身の今後の教員としての在り方、生き方について見直すきっかけを頂けました。

本事業を企画・運営していただきました、北海道教育庁学校教育局高校教育課国際交流係の土居先生をはじめ、本事業に関わっていらっしゃる北海道教育委員会のご担当者すべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。